

第十七号



尋常新體讀本

卷八

図書 和図書 遡



福岡教育大学蔵書

T1A3
10
Ki44j

明治廿七年十一月一日
文部省檢定簿



尋常小學
新體讀本

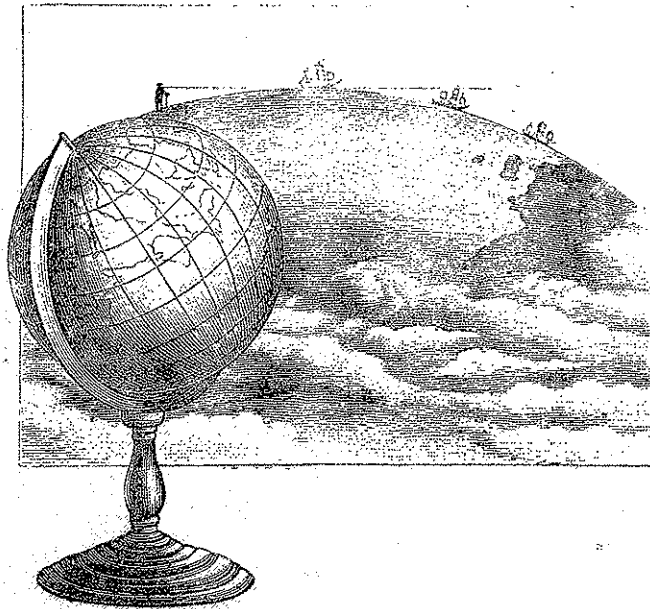
卷八

第一課 地球

世界も平たくしてはてゝなきも、お如くふ見ゆれども、其の實を圓くして球の如きものなり、故ふ之を地球といふ。

地球ハ甚大いあるをもて我等の目ふは、其れ全形を見るゑと能はず。されど其の形の圓きことは左の事實のみふても明かに知らるゝなり。

海濱より沖に向ひて船舶の出帆を見る



ふ初めて明かに其の全體を見れども漸く遠ざかるに隨ひ水にかくれて唯帆柱のみ見え更ふ遠ざかるふ及びてハ帆柱の末も見えざるに至る。

されど此の時小高き岡に登りて、船の行くつをふむれば、尚暫くの間に之を見るゑとを得べし。是れ恰橙の實に這

小等奇異言
へる蟻は漸く進みて、反對の方へ行くととき、終に見難くなり、ゆくを少く我が身は位置を變ぜるときは、容易く之を見ると同し理あり。あれふても、地球は圓きこと、大方知らるゝあり。猶更に慥なるを、船を大海へ乗り出して、西へ西へと進む、或は東へ東へと向ふとき、いつの戻りて、再元の海邊に返るゝとあり。是れ世界を一周したる人々、能く知る所なり。も、地球圓からむといかて、真直ふ一方に進みて、再元の處に返らるべき。

さて地球の表面を陸と水との二つに分れ、其の周圍凡一萬里あり。水面も廣く、陸地も狭くして、其の割合三と一との如し。

陸の上には數多の國々あり。我々の日本の西北へは海を隔て、朝鮮國あり、又西の方には支那國あり。此の國は王家の代る毎に其の國號を異にし、或は唐といひ元といひ明といひ、今ハ清と呼べり。支那は西へ印度あり。昔ハて

んちくといへり。此の外ふも國々數多あり、我が國と條約を取り結びて貿易を行ふ國のこにては、尚二十餘國あり。其の中重なるも北、以ぎり、とふらん、とどいつ、ろーや、北あめりか、合衆國等なり。

文題 一、船。

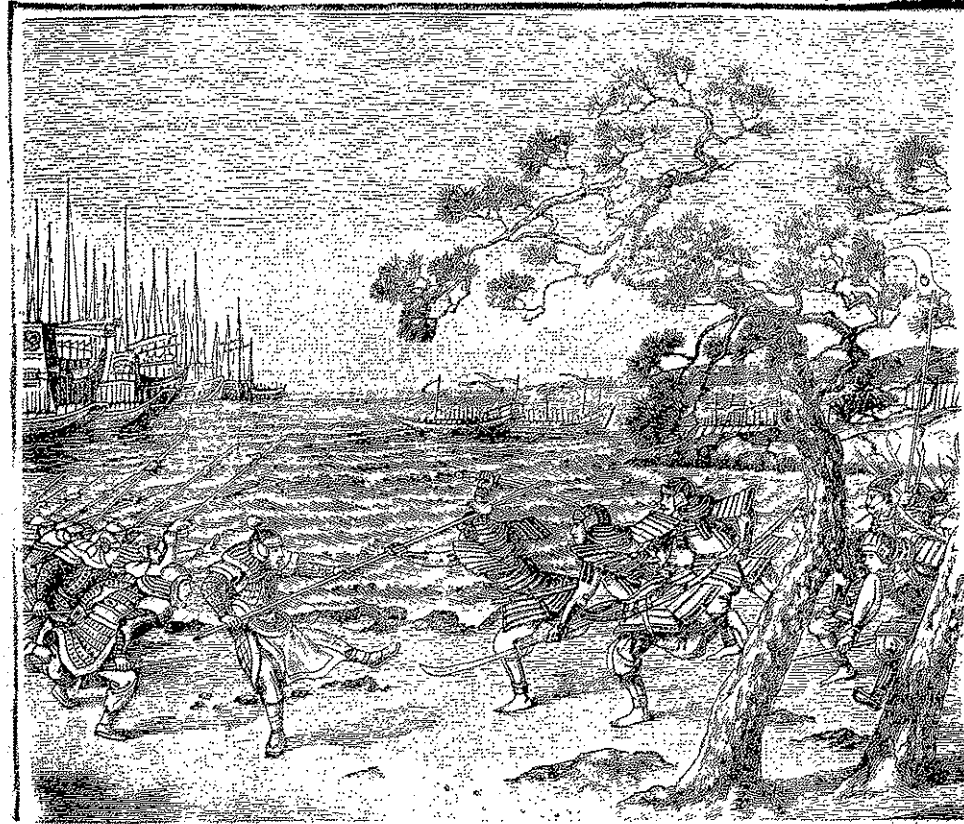
ニ、長崎へ赴かんとして汽船の出帆日と賃錢を問ひ合はする文。

第二課 元寇

今を距るまゝと凡三百餘年前、支那の北方なる蒙古に忽必烈といへる豪傑出てて、支那全國を

攻め取り、やがて天子の位に即きて、國を元と號せり。

忽必烈、勝に忸れて世界を一統せんとの志を起し、先づ朝鮮を屬國とし、終に我が日本を威伏せんとて、海を越えて使者を遣はしたり。然るに其の書の辭甚無禮あり、かば、時の執權北條時宗大いふ憤り、直に其の使者を追ひ還せり。其の後、使者屢來り、かど皆之を追ひ還しければ、忽必烈、兵威を示して、おどさんと思ひ、兵を



發して我が壹岐對馬及び筑前小寇せしめたり。
程經て忽必烈又使者を遣こし我の返答を促しければ時宗益憤り、使者を捕へて其の首を斬りたり。

あゝに於て忽必烈兵力を以て日本を奪とんと決し、我の後宇多天皇の弘安四年十萬の兵を發し、范文虎を大將として數千艘の軍艦に打ち乗り、雲霞の如く筑紫の海に押し寄せたり。

時宗報を得て少しも騒がず、令を九州の將士に傳へて、元軍を追ひ拂はしめしに、將士皆奮ひて、武士の國に報あるハ斯かる時にこそあれ、いざ夷どもを伐ち拂ひて國威を輝かさん。とて、各要害を固め、敵來れば防ぎ退けば追ひ、水陸に戰

晝夜凄トかりき。

中にも草野七郎ハ波を破り風を冒して敵艦
小迫り火を放ちて敵兵千餘を殺傷し河野通有
は小舟に乗りて敵の大艦に近づき其の内に跳
り込めて數十人を斬り船將を虜ふせしるバ元
軍畏れて陸上らず船を鷹嶋の沖に退けたり。
然る小海上俄に風荒れ浪起りければ敵の軍
艦木の葉は如く吹き散され溺れて死するもの
甚多のりき。我が兵之小乗ト追ひ撃ちて遂に

元軍を皆殺ふし唯三人を生しおきて其の國
に還らしめたり。此のもは國に還りて日本國
の武勇を語りければさしも猛き忽必烈もおれ
小驚きて遂小我が國を窺ふ念を絶ちたりとぞ。

風も荒びて浪怒り
劔は鳴りて人勇み
雲とむれ來る奴ばら
草刈る如く薙ぎ倒し
山を阿ざむく大船を

木の葉の如く 吹き散ら
筑紫の海に 空晴れて
長く 輝く 日北御影

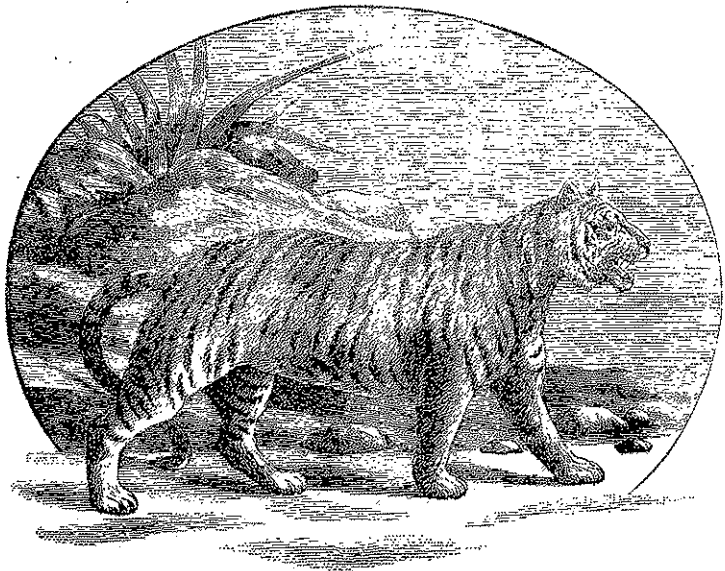
文題

一、地球の圓き證據を記せ。

二、前題の返事。

第三課 虎

此ノ圖ヲ見ヨ。コレハ虎トイフ猛キ獸ノ圖ナリ。虎ハ朝鮮、印度等ノ山林ニ棲メドモ、日本ニハ昔ヨリ居ラズ。其ノ毛ハ黃色ニシテ黒キ斑アリ、身ノ長ケ六七尺、高サ四尺餘ニシテ骨組



甚遅シク、口ノ邊ニコハキ鬚アリテ、自威風アリ、一タビウソブケバ、百獸恐レテ息ヲモ出サズトイフ。

此ノ獸ハ、常ニ生物ヲ食シ、而シテ其ノ外形ハ勿論、體中ノ細ナル部分マデモ亦、甚猫ニ似タリ。其ノ足ニハ、鋭キ爪アリ、足ノ裏ニハ、柔カナル袋ノ如キ肉ア

リテ常ハ其ノ中ニ爪ヲ隠セドモ、生物ヲ捕フル
トキハ、爪ノ外ニ顯ル、コト、猫ノ鼠ヲ捕フルト
キニ異ナラス。舌ニハ、一面ニ刺アリテ恰ワサビ
オロシノ如シ、是等モヨク猫ニ似タリ。

虎ハ、生物ヲ捕ラントスルトキハ、先身ヲ伏セ
テ少シモ音ヲ爲サズ、ヤガテ善キ間合ヲ見スマ
シ、一散ニ跳リカ、リテ攫ミ倒ス、猫モ亦然リ。
此ノ外、虎ノ猫ニ似タル所頗多シ。

虎ノ外、尚猫ノ慣習ヲ具ヘタル獸アリ、豹、獅子

ノ如キ是ナリ。

豹ハ、虎ニ似テ小サク、毛ノ紋樣極メテ美麗ナ
リ。

獅子ハ、最猛キ獸ニテ、頭ニ長キ毛ヲ被リ、タバ
見ルサヘモ恐ロシク、且其ノホユル聲甚スサマ
ジクシテ、サナガラ雷ノ轟クガ如シ。モシ人里
ニ近ヨリテホユルコトアレバ、牛モ馬モ、オデオ
ソレ、身ヲ忘レテ狂ヒ廻ルトイフ。

凡、猛獸多シト雖、獅子程ノ猛キモノナシ。サ

レバ古ヨリ獅子ヲ稱シテ獸ノ王トイヘリ。

文題

一、河野通有ノ武勇。

二、旅行屬。

第四課

加藤清正ノ武勇

加藤清正ハ通稱ヲ虎之助トイヘリ。少キヨリ豊臣秀吉ニ仕ヘ、屢戰場ニ出デテ、拔羣ノ手柄ヲ立テシカバ、次第ニ出世シテ、遂ニ肥後熊本ノ城主トナリタリ。

朝鮮征伐ノ時ニハ、清正先鋒トナリテ深ク敵地ニ攻メ入り、此處ノ城ヲ乘リ取り、彼處ノ敵ヲ追ヒ拂ヒテ、大イニ武勇ヲ顯シタリ。朝鮮人大イニ畏レテ鬼上官ト呼ビ、鬼上官來ルトイヘバ、戰ハズシテ先逃レ、啼ク兒モ之ヲ聞ケバ聲ヲ止メタリトゾ。

清正ノ朝鮮ニアリケル時、或ル夜、虎其ノ陣中ニ入りテ馬ヲ奪ヒ去リ、又近侍ヲモ嚙ミ殺シケレバ、清正大イニ怒リテ虎狩ヲ催シケルニ、一匹ノ大虎遙カ彼方ヨリ顯レ出デタリ。士卒鐵砲ノ筒口ヲソロヘテ撃チ取ラントセシヲ、清正令

ヲ傳ヘテ之ヲ押シ止メ、自鐵砲ヲ執リテ、虎ノ路ヲ遮リタリ。虎ハ之ヲ見テ大イニ怒リ、爪ヲ顯シロヲ開キテ、跳リカ、リケルヲ、清正子ヲヒヲ定メテ、彈丸ヲ其ノ喉ノ中ニ撃チ込ミケレバ、唯一發ニテ斃レタリ。

文題 一牛。 二、寄留屬。

第五課 椎茸

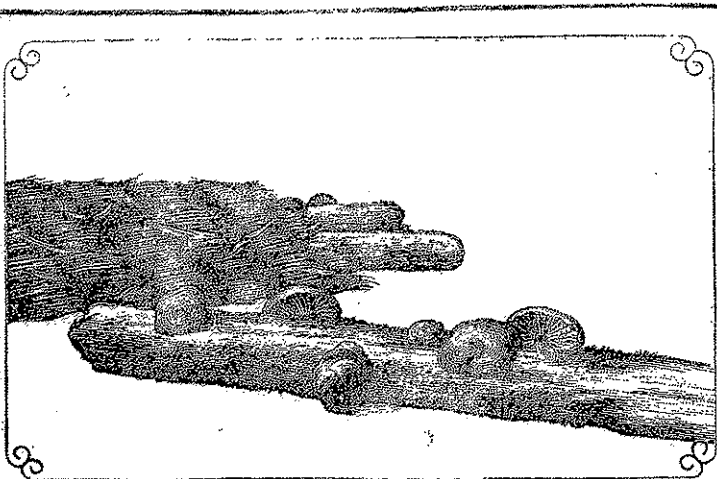
菌の類ふを食ふべきもの甚多し。されど、毒あるものも亦寡のらぬ故に、見おれぬものも妄

りに食ふべからず。

菌の中、人れ廣く嗜むものを椎茸なり。

椎茸ハ、春と秋とふ生ざるものにて、笠に上薄黒く、其の他を白し。或ハ山林ふ自生せるものともあれど、人れ廣く用ふるは大抵農夫の作りたるあり。

椎茸を作るふは、先椎、櫛、櫛などの幹を程よく切りて處々ふ



疵を附け、風は吹き通さぬ日蔭に立て列ねて、常に濕氣の絶えぬやうふすべし。斯くすれば、其の幹漸々に朽ちて、椎茸多く生ずるあり。

作りたる椎茸は、火で乾のして長く貯へ置けるやうふし、然して後諸方に送り出す。干椎茸と云へるは、即是あり。

汝等試みに、椎、櫟、櫟などの材を横へ日蔭の地に置き、おれふ筵を覆ひ、其れ上より米の流し水を注ぎおけて、常に濕氣あるやうふ爲し置きて

見よ。春と秋とふし、必椎茸の生ざるを見ん

文題

一、加藤清正公を覽す。

二、椎茸を贈る文。

第 六 課

海草

海の中にも種々の草あり、之を海草と云ふ。

海草は中人の食用として、最賞美するものハ昆布と海苔あり。

昆布ハ海中は岩石に生ずる帯の如き草ふして、其の太なるハ幅一尺に餘り、長さ數丈に至る。其の色青黄ふして、兩邊稍黒色を帯ぶ。

干したる昆布ハ鳶色にして稍黒し。又青昆布として緑色なるものあり。おれハ干したる昆布を煮て緑色に變ぜしめたるものなり。



又とろ、昆布として白色あるものあり。おれハ昆布を薄く削り晒し上げて白色ふしたるものあり。

昆布ハ味ひ甘く、養分も富まれば好みて食ふもの多し。北海道の海にハ多く之を産する故、毎年夏の間に刈り取り干して諸方へ出す。其の外國へ輸出するもの、金高百萬圓に近し。海苔ハ海中に生じる小さき草あり。其の色紫色にして稍黒し。冬季海中に柴を建て置けむ、海苔ハ自然と之に附きて、忽ち繁殖す。之を取りたる後ハ紙を漉くと同じ仕方にて薄く四角に漉き干して食品とす。炙りて食すれば風味

甚好。

海草ふい此の外あらめわらめとあるてん草等あり。あらめわかめハ干して食用とてところてん草も干し上げたる上更ふ晒してところてん又ハかんてんを製する原料とす。

文題

一 松茸

二 前題の返事

第七課

商業

品物ヲ賣買シ其ノ間ニ利益ヲ得テ生計ヲ營ムモノヲ商人トイヒ其ノ業ヲ商業トイフ。

商業ハ至リテ易キ事ノヤウニ見ユレドモ實ハ然ラズ。

商人トナルニハ讀ミ書キ算術ハイフニ及バズ商業ニ必要ナル事柄ハスベテ能ク辨ヘザレバ利益ヲ得ルコト少クシテ損失ヲ速クコト多シ。

品物ノ價ハ時ニヨリテ或ハ上リ或ハ下ルモノナレバ時ヲ考ヘテ其ノ仕入ヲ爲スコト肝要ナリ。又同ジ代物ニテモ處ニヨリテ其ノ價低

キコトアリ、高キコトアリ。故ニ低キ處ニテ仕
入ヲ爲シ、荷物運送ナドノ入費ヲ差シ引キテ、猶
利益アリト思フトキハ、東ノハテニテ買ヒ入レ、
西ノハテニテ賣リ捌クコトアリ。

スベテ商人ハ、内外ノ物産ヲ知り、運送ノ便否
ヲ究ムベキコトナレドモ、外國ノ商人ト貿易ヲ
爲スモノハ、取り別ケ之ヲ詳ニスルコト肝要ナ
リ。我が國ニテ、外國ノ商人ト貿易ヲ行フ處ハ、
横濱、神戸、長崎、新潟、函館ノ五港ナリ。

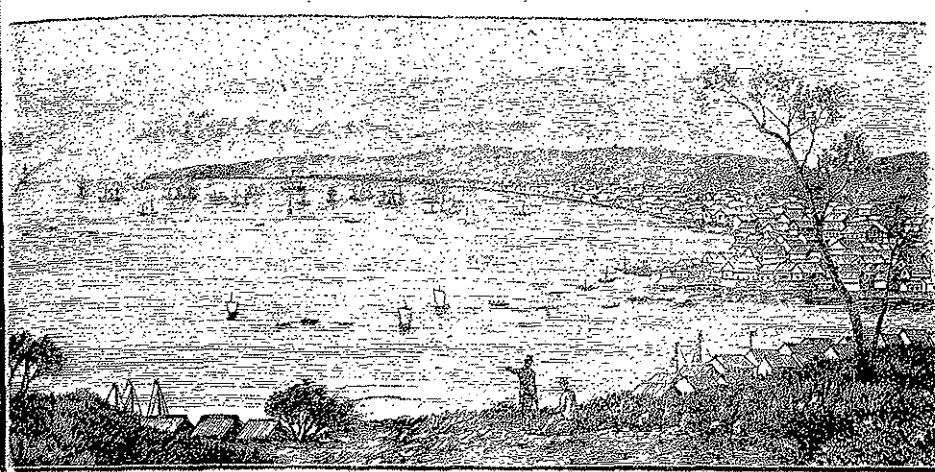
貿易品ノ内、我が國ヨリ輸出スルモノハ、生糸
ト茶トヲ主トシ、外國ヨリ輸入スルモノハ、綿ト
砂糖トヲ主トス。

文題 一、昆布。 二、金子借用を依頼する文。

第 八 課 五 港

海水弓ナリニ曲リテ、深ク陸地ニ入り込ミ、船
舶ノ出入ニ便利ナル處ヲ港トイフ。

此ノ圖ヲ見ヨ。海水深ク陸地ニ入り込ミ、船
舶其ノ沖ニ輻湊シテ、帆柱林ノ如ク立ち並ベリ、



コレハ何處ノ景ナルカ。コ
レハ横濱港ノ景ナルベシ。
横濱ハ東京ノ南七里餘ノ處
ニアル大港ナリ。市街清潔ニ
シテ宏壯ノ家屋立ち並び支那
人西洋人ナドモ多ク住メリ。
此ノ地ハ内外ノ貿易頗盛ニ
ニシテ陸ニハ汽車ノ往復息ム
時ナク海ニハ船舶ノ出入絶ユ

ルヒマナシ。

横濱二次ギテ貿易ノ盛ナルハ神戸ナリ。
神戸ハ攝津ノ國ニアリ。市街ハ湊川ヲ隔テ
テ兵庫ニ連リ港内ハ水深クシテ大船ヲ繋グニ
宜シク其ノ位置東西ノ要衝ニ當ルヲ以テ汽車
汽船ノ往復常ニ絶エズ。

長崎ハ肥前ノ國ニアリ。海水深ク入りテ風
波ノ患ナク市街甚賑ヤカナリ。此ノ港ハ古ヨ
リ外國船ノ出入セシ處ニシテ貿易夙ニ行ハレ

今モ猶盛シナレドモ横濱神戸ニ比スレバ遠ク及バズ。

新潟ハ越後ノ國ニアリ。北國第一ノ大港ナレドモ港内水浅クシテ大船ヲ繋ギ難ク市街繁盛ナレドモ貿易ハ盛シナラズ。

函館ハ渡島ノ國ニアリ。港内水深クシテ四時風波ノ患ナク運送便利ニシテ北海道第一ノ良港タリ。

文題 一、商人。 二、貸金を催促せる文。

第九課 會社

多くの人々、組ゝ合ひて事業を興せむ、一人より出た資本ハ僅少ふても、相合はすれば多額とふるを以て、廣く商業を営み盛んふ物産を造ることを得べし。彼の某會社、何組合と唱へて、商業を営む、或は工業を事とするものは、皆斯かる仕方ヲ基きて設立せられざるものなり。

商業を営む會社に、合名、合資、株式等ハ會社あり。銀行も亦會社の一ふりて、株金を募りて營

業の資本となり、又他人に金を預り、之を貸し附けて金銭の融通をつけ、或は爲替を組み、金銭授受の煩勞を省き、或は紙幣を發して貿易の便をえらるもあり。

又保險會社ハ、火災海上、生命等の危険を引き受くる會社あり。是等の保險を依頼せんと欲する人も、其の社と約束を結び、毎年僅の金子をかけおくあり。然る時、會社ハ其の人或は死し、或は火災に罹り、或は積荷を失ふとあれば、約束の

金高を拂ひ渡を定めなり。故に生命保險會社に入れば、身死すとも遺族道路に飢うるの悲なく、火災保險を依托すれば、家焼失すとも居處に迷ふの恐なく、海上の保險を依頼すれば、難船にあひて積荷を失ふとも損失を蒙るの患なし。

此の外鐵道會社、郵船會社、物産會社、牧畜會社、織物會社、紡績會社、製紙會社等ありて、一々數ふるに暇あらず、商業を盛大にし、物産を増殖せしめんふハ、何れも缺くべからざるものなり。

文題 一、港。

二、鐵物會社を起さんとして會合を催す文。

第十課 動物

牛馬、雀、鳥、鯛、鯉、蝦、蛤などの類ハ皆己の心れままに身を動かして、此處より彼處へ移ることを得る故之を總稱して動物といふ。

動物ハ陸に住めるものあり、水に住めるものあり。其の數頗多くて、一々名稱を擧げ難し。

されど其の中互に似よりたるもの多き故類

に因り、之を分ちて鳥類、獸類、魚類、介類、蟲類の五つとす。

雀、鳥の如く二本の足ありて、羽翼を具ふるも此を鳥類と名づけ、牛、馬の如く四本の足ありて、全身に毛を被るものを獸類と名づく。

鯛、鯉の如くひれと尾とを具へたるものハ皆、魚類と名づけ、蝦、蛤の如く硬き殻を被りたるものハ總べて介類と名づく。

此の外、蝶、蜻蛉、蛇、蛙の如く鳥、獸、魚、介の中ハ入

れ難きもの尚甚多し。是等を總稱して、蟲類といふ。

以上を、只動物の外見を基きて分類したるに過ぎざるを、更ふ委しく吟味するときは、魚に似て魚ならず、獸に似て獸ならざるものもあり。されば、物の分類を事とするものは、詳ふ内外の組立を吟味し、其の性質、慣習を知りて、後此の魚なり、彼は獸なりと判断を下すなり。

文題一、爲書。二、荷物延着のわけを問ひ合はする文。

第十一課 人

人モ亦動物ノ中ノ一種ナレドモ、鳥獸魚介ノ如キ愚ナルモノニ非ズ。智惠賢ク道理明カニシテ、萬物ノ上ニ位スルモノナリ。

人ノ身體ハ、之ヲ分チテ大略頭、胴、四肢ノ三ツトス。

頭ハ、最モ大切ナル處ニシテ、其ノ中ニ腦髓トイヘルモノアリ。人ノ物事ヲ知り、道理ヲ明ラヌ、苦樂ヲ感ズルハ、全ク此ノ物ノ働ニ因ルコトナ

リ。

胸ハ、胸ト腹トノ二部ニ分ル。胸ノ中ニハ、心臓トイヘル一ツノ袋アリテ、左ノ乳ノ下ニ垂レ、又肺臓トイヘルニツノ袋アリテ左右ニ垂ル。心臓ハ、血ヲ出入スル道具ナリ。血ハ、全身ヲ養フモノニテ心臓ヨリ出テ、管ヲ傳ヒテ處々ニ廻リ、他ノ管ニ入りテ再、心臓へ歸リ來ルヲ常トス。

肺臓ハ、空氣ヲ呼吸シテ、血ヲ新鮮ニスル道具

ナリ。全身ヲ養ヒテ、心臓ニ歸ル不潔ノ血、此處ニ至リテ、又鮮紅ニナリ、再、心臓ニ入りテ、更ニ全身ヲ養フ。

腹ノ中ニハ、食物ヲ受クル袋アリ、之ヲ胃トイフ。又長キ管ノワダカマレルアリ、之ヲ腸トイフ。

胃ハ、食物ノアラゴナシヲスル道具ナリ。食物咽ヲ下リテ胃ニ至レバ、胃ハ酸キ汁ヲ加ヘテ、自、伸ビ縮ミヲ爲シ、食物ヲ揉ミテ之ヲ柔カニス。

己ニ柔カニナリタル食物ハ胃ヨリ小腸ニ下
ル。此ノ時小腸ハ苦キ汁ト甘キ汁トヲ加ヘ全
ク食物ヲ消化シテ乳汁ノ如キモノト爲シ細キ
管ヨリ之ヲ血中ニ送りテ身ヲ養フノ用ト爲ス。
其ノ糟ノ養分トナラザルモノハ大腸ニ下リテ
終ニ體外ニ出ヅ。

文題 一 ツルトサギ。

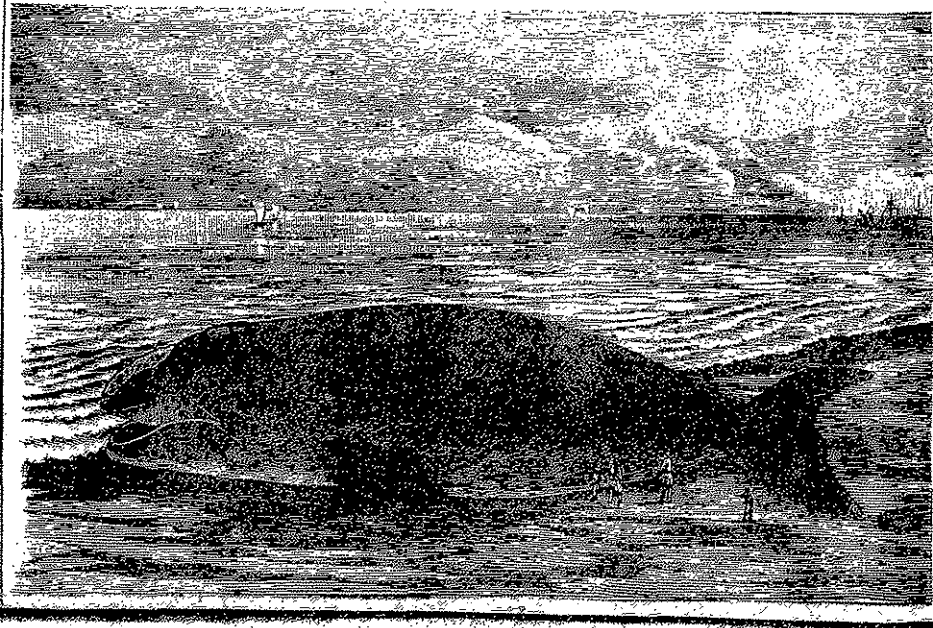
二 兄の許へ母の病氣を知らせる電信。

第十二課 鯨

動物ノ中最モ大キナルモノハ鯨ナリ。鯨ハ

水ニ住ミテ外形魚ニ似タ
ルガ故、魚類ノ如ク思ハル
レドモ、其ノ實ハ、魚ニ似タ
ル處少クシテ獸ニ似タル
處却テ多シ。

凡、魚類ハ皆、卵ヨリ生ズ
ルモノナレドモ、鯨ハ、則、犬
猫ノ如ク胎生トテ、形ヲ成
シテ生マル、モノナリ。



シカノミナラズ、魚ハ、鰓ニテ水ヲ呼吸スレドモ、鯨ハ、犬猫ノ如ク肺臟アリテ空氣ヲ呼吸ス。又、魚ノ血ハ、皆冷カナレドモ、鯨ノ血ハ、温カナリ。是ノ理ヲ推シテモ、其ノ魚ニ屬セズシテ獸ニ屬スルコト明カナリ。

鯨ハ、身ノ長ケ八九丈、周圍四五丈ニ至ルモノアリ。頭ハ、全體ノ長サノ三分ノ一アリテ、上ニ水ヲ噴ク孔ヲ具フ。其ノ靜カニ水面ニ浮ブトキハ、鳴ノ俄ニ湧キ出ヅルガ如ク、水ヲ噴キ出ス

有様ハ、サナガラ雨ヲ降ラスニ似タリ。口中ニハ、齒ナクシテ鯨鬚ト稱スル簾ノ如キモノアリ、コレハ、鰓ノ如キ小魚ヲ吞ミ込ムニ當リ、共ニ口中ニ入りタル水ヲ漉シ出シテ、魚ノミヲ止メン爲ナリ。

鯨ハ、其ノ用多キモノナリ。皮膚ノ下ニ厚サ一尺許ノ脂肪アリ、取りテ燈油ヲ製スベシ。肉ハ、又、其ノ下ニアリテ、脂肉ト共ニ人ノ食トナル。鯨鬚ハ、俗ニ鯨骨ト稱シテ、甚彈力強キモノナレ

バ種々ノ器具ヲ作ルニ用フ。

文題

一 食物ハ如何ニシテ消化スルカ。

二 母の死を知らずる文。

第十三課

鯨獵

我が國ハ、四方海あるが故に到る處に海濱多し、此處に住むものも、概漁業を職とす。其の地と海との有様よりて、鰯を捕るもあり、鮭を捕るもあり、鰹を捕るもあり、又鯨を捕るもあり。鰯ハ、處々、小産せれども、安房上總、小多し、鮭ハ、北海道、小多し、鰹ハ、土佐、薩摩、鯨ハ、紀伊と九州の西

北海と小多し。

汝等、鯨獵を見たることありや。恐らくも見るもの稀ならん。鯨を獵するにハ、數多の小舟を出して、處々、小待ち受け、其の水面、小浮ぶを見て、代るく、進み、槍、小似たるもりといふものを投げ付けて、遂に之を殺をふり。

鯨ハ、一二本のもりを受けて、俄に死せるものに非ざれども、尚呼吸をなさざるに、屢、水面に浮びて、次第、小數本のもりを受くるを以て、遂

に死するあり。元來、鯨ハ尾ハ非常の力有る故、小舟の如きハ屢これハ打たれて覆さるゝとあり、故ハも一無難に之を捕へ得れば、獵師の喜一方ならず、直に繩を結びて、海邊ハ引き來ること、恰、軍人の戦ハ勝ちて陣を引き上ぐるハ似たり。鯨獵ハ利得多きもの故、昔ハ一匹の鯨を獲れば、七箇村賑ふとさへいへり。されハ、之を獲る手段も次第ハ進みて、近來ハ、船ハ大砲を仕かけ、之を放ちて一撃に撃ち殺をとおゝなれり。

文題 一、かうもり。 二、悔みの文。

第十四課 勉強

何事も勉強して怠らざれば、末遂ハ成らずといふことなり。昔より事を遂げて、名を遺したる人ハ、皆勉強の功によりて、之を得たるなり。小川泰山ハ、勤勉ハ人あり。幼くして山本北山といへる先生の許ハ通ひけるが、以かある大風大雨の日と雖、嘗て一日も休みたることなかりき。

或る日大雪降りて、傘さへさへがこきに泰山
少しも厭はざ、大きなる笠を戴き、以つその如く
師の許へ往きこり。とか
くする中雪益降り來り
て、道を埋め、歩行意に
任せずして、遂に倒れ
たり。

折りふり通りかゝり
一人、泰山の雪中に倒れ居



るを見て、之を憐れ、抱き起して、其の始末を尋ね、斯
かる大雪ふては、先方へ至らんことはむづかしい、
今日へ思ひ止りて、家に返るべし。と勧めけるふ、
泰山首をふりて、今年の今日も實に一生に一度
の今日あり、休むことい好まざるとて、更なる大雪を
冒し、師に許ふ至りて、業を受けたり。

泰山、斯く學を勉めて怠らざ、日夜書物ふ眼を
さらゑ、のむ、十五六歳の頃ふは、一かどの學者
にありとぞ。

文題

一、綱。二、死亡屆。

第十五課

立身ノ順序

二階へ登ルニハ階子ノ初段ヨリ登リ始ムルヲ要シ、千里ノ遠キニ到ルニハ、一步ヅ、足ヲ運ブヲ要ス。モシ斯カル順序ヲ踐マズシテ、急ニ二階へ登ラントシ、速ニ遠キニ到ラントセバ、必躓キ仆ル、ニ至ルベシ。人ノ事ヲ企テ業ヲ起スモ亦甚之ニ似タリ、思ハズハアルベカラズ。

加藤清正ハ、武勇一邊ノ人ニハアラテ、極メテ

着實ノ人ナリキ。或ル時近臣ニ語リケルヤウ、余モシ領地ヲ召シ上ゲラレ、裸體ノマ、ニテ放逐セラル、コトアリトモ、三年ノ内ニハ、必元ノ士トナラン。其ノ術如何ニトイフニ、サシテムツカシキコトニ非ズ、先風呂番トナリ、水ヲ汲ミ火ヲ焚キテ、晝夜勉ムレバ、身體温リテ寒サヲ忘ルベシ。又、他人七荷ノ水ヲ汲ムトキハ、余ハ八荷ノ水ヲ汲ミテ、怠リナク勤ムレバ、タトヒ如何ナル吝嗇ノ主人ニテモ、古キ衣服ノ一二枚ハ、惜

シマズシテ與ヘラルベシ。

猶月日ヲ累子ナバ、少シハ日用ノ品ヲ與ヘラルベシ。之ヲ集メテ、先粗末ノ脇差ニ代ヘ、ソレヨリ馬ヲ好メル士ヲ求メテ之ニ仕ヘ、好ク其ノ馬ヲ飼ヒナバ、必褒美ヲ賜ハルベシ。コレニテ太刀ヲ買ヒ、ソレヨリ名高キ人ノ家僕トナリテ、身ヲ立ツルハ我が方寸ニ在リ。トイハレシトゾ。

文題一、蠶。

ニ、或る學校へ弟を入学せしめんとして其の
もやうを朋友に問ひ合はする文。

第十六課

四ツノ職業

田畑ヲ耕シテ穀物野菜ヲ作り、蠶ヲ養ヒテ繭ヲ取ルモノハ、農夫ナリ。綿ノ木ヲ植エテ綿ヲ取り、樹木ヲ仕立テ、材木ヲ伐リ出スモノモ、亦農夫ナリ。網ヲ引キテ魚ヲ捕リ、水ヲ搜リテ貝ヲ拾フモノハ、漁夫ナリ。海ニ入リテ海藻ヲ取り、船ニ乘リテ鯨ヲ捕ルモノモ、亦漁夫ナリ。繭ヲ繰リ綿ヲ紡ギテ絲トシ、絲ヲ織リテ織物トナスモノハ、職工ナリ。木ヲ組ミテ膳ヲ造リ、土ヲ燒キテ茶碗ヲ製スルモノモ、亦職工ナリ。

農夫漁夫及ビ職工ノ取り、又作リタルモノヲ
買ヒ集メテ、之ヲ諸方ニ送り、人々ヲシテ居ナガ
ラ之ヲ用フルコトヲ得シムルモノハ、商人ナリ。
農夫ノスルワザヲ農業トイヒ、漁夫ノスルワ
ザヲ漁業トイヒ、職工ノスルワザヲ工業トイヒ、
商人ノスルワザヲ商業トイフ。凡此ノ四ツノ
職業ハ、世ノ中ニ缺クベカラザルモノナレバ、何
レモ疎カニ思フベカラズ。モシ農夫漁夫ノ如
キモノナケレバ、日用ノ食物ハ容易ク得ベカラ

ズ。世ニ職工ナキトキハ、人々自織物ヲ織リ、膳
碗ナドヲ造ラザルベカラズ。穀物モ自ラ作り、
織物モ自織リ、膳碗モ自ラ作り、塩砂糖モ自ラ製
スルハ、イタヅラニ手數ノカ、ルノミナラズ、良
キ品ノ得ラルベキヤウナシ。

農夫種々ノ穀物ヲ作り、漁夫多クノ魚貝ヲ漁
リ、職工盛シニ器具ヲ造ルトモ、商人ナケレバ、イ
ヅクノ人モ好ム物ヲ購ヒ、欲シキ品ヲ求ムルコ
ト能ハズシテ、不自由ニ堪ヘザルベシ。是レ此

ノ四ツノ職業ノ世ニ大切ナルアラマシナリ。

文題

一、徒ラニ大望ヲ起スベカラズ。

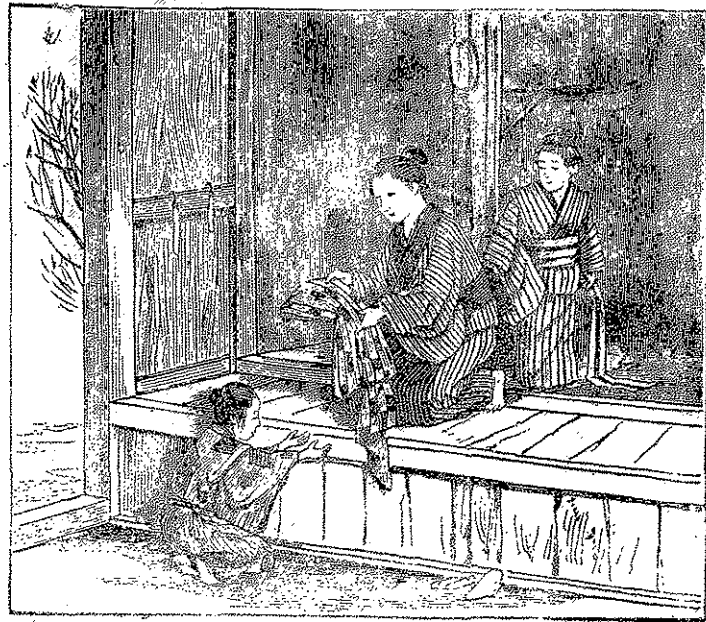
二、前題ノ返事。

第十七課

鈴木宇右衛門一家の慈善

年ふよりて穀物の登豊かふることあり、又豊かふらざるおとあり、豊かふる年を豊年といひ、豊のならざる年を凶年といふ。凶年ふむ貧民食を得がとくして道路小斃るゝことあり、之を饑饉といふ。今より百年前、陸奥、出羽、小大饑饉ありける、小陸奥殊小甚くして、貧民の餓死するもの頗多く、其の僅小生き残れるものも、出羽に往きて食を乞へり。

時に出羽、小鶴岡、小鈴木宇右衛門といふものあり。此の人素より慈善の心深かりければ、之を見るに忍びず、田畑、衣服、家財等を悉く賣り拂ひて救助の資となりしり。其の妻も亦優き心の人なれ



バ夫を助けて共に力を盡く、櫛笄を始めとして衣服、小道具までも悉く賣り拂ひ、終に唯一枚残りたる着替の衣服までも賣り拂ふんとしたり。宇右衛門之を見て、

女の身ハ男と違ひて外へ出づるにも着替な
くては叶ふまじ、責めておれのは残り置く
べー。

といひけるを妻聞きて、

否、此の着替を残り置かば、自外へ出づる心も

起るべー、多くの人ハ斯く苦むを餘所不見な
がら、いのでか己れ一人好き衣着て外に出て
らるべき。

とて、遂ふ之をも賣り拂ひて、饑ゑる人々を救
ひたり。

其の翌年の初め饑ゑ疲れたる十二三歳の女
子、身小破れたる單衣一枚をまとひ、以てあはれ
かる有様ふて、門口に立ち食を乞ひたり。をりふ
ゝ其の日は風強く吹き、雪さへ降りまきりて、重

着たる身にても堪へがさき程かりかば妻
ひ之を見て己が娘を呼び、

そなたひ綿入二つ重ねて暖に着あみたるの
あの子を見よ、唯一枚の着物さへ破れて寒さ
を防ぎかねたるひ、以のふもあられふらばや、
年も同位なれば、ゆきさけを程よかるべし、
其の綿入一枚取らせずや。

といへば娘ひ喜ぶ、げふ母の言に従ひ、直に善
き方の綿入を脱ぎて、彼の娘ふ與へるかば、兩親
ひ我が娘の優き心を見て、涙を流して喜びこ
りとす。

文題

一、志るところの職業を記せ。

二、養育の傳言を頼む文。

第十八課

凶年の備へ

饑饉に實に恐るべきものあり。其の甚き
に及びて、青葉青草ひ皆食ひ盡く、遂に木
の根を噛み、食慾の最止め難き時、疊筵をさ
食ふものあり。むの、大饑饉ふは餓死人の
死骸、道路ふ充ちて、誰取り收むるものもなく、

中に入大判小判を懐にして斃れざるものさへあり。實小目も當てられぬ有様ありき。

今日は貿易繁昌の世あれば、たとひ日本一般の不作なりとも、外國より穀物を輸入をべしと思ふものあり、是れ大いなる誤り。

斯かる時ふは、穀物の價甚騰貴することば言ふまでもなし。されば、昔の人ハ金錢ありて米穀なきに餓死し、今の人ハ米穀ありて金錢なきに餓死せん。

饑饉ハ突然として來るものにあらず、必、二三年乃至四五年前より連年氣候不順ありて作物十分に出來ざるものなり。を豫め用意して、粃、甘薯、雜穀等を貯ふる時ハ、己れも餓死を免れ、餘りあれば人をも救ふを得べし。故に遠き慮ある人は、たとひ豐年打ちつくことありとも、常に金穀を積みて凶年ふ備へ、かりそめにも心を弛め奢を恣にせることなし。

文題

一、不幸の人を救ふべし。

二、時計製造の業を覺えんとて親類のやうに奉公口を頼み入るゝ文。

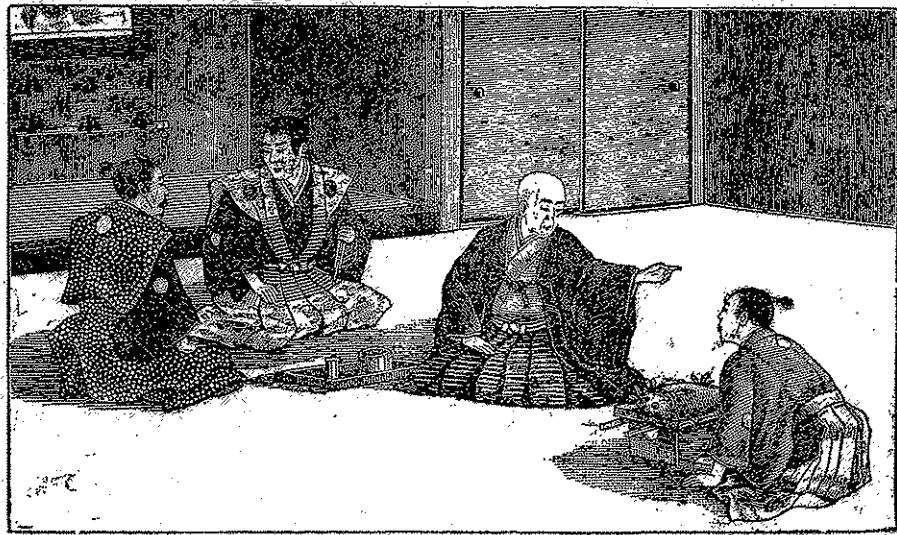
第十九課 黑田如水

豐臣秀吉朝鮮ヲ征伐セントシケル時、日根野某トイフモノ、軍用金乏シクテ支度整ヒカ子シカバ、三好某トイフ人ニ頼リテ、黑田如水ヨリ銀百枚ヲ借り受ケテ出陣シタリ。

斯クテ歸陣ノ後、返金セントテ、三好ト共ニ黑田ノ宅ニ往キケルニ、折リフシ或ル人ヨリ如水方ヘ鯛一尾贈リ越シタリ。如水家來ニ向ヒテ、其ノ鯛ハ三枚ニオロシ、身ハ鹽ニ漬ケ置キ、中才

チヲバ吸物ニシテ此ノ客人ヲモテナスベシ。トイヒツケ、手輕ナル料理ヲ出シテ、兩人ヲモテナシケレバ、彼ノ兩人ハ心ノ中ニ其ノ吝嗇ナルヲ卑ミタリ。

ヤガテ銀子ヲ出シ、厚ク禮ヲ述べテ返シケルニ、如水コレヲ見テ、此ノ金ハ最初ヨリ



進上セシ心得ナリキ、且、大切ナル軍用ニ立チシ
コソ、此ノ上モナキ仕合ナレ。トイヒテ、押シ戻シ
ケレバ、兩人始メテ如水ノ心ガケヲ曉リ、己ガ心
ノ至ラザルヲ愧ヂタリトゾ。

文題

一、大水。

二、大水見舞の文。

第二十課

貯蓄

人ニハ思ヒガケヌ事起リテ、俄ニ金錢ノ入用
ナルコトアルモノナレバ、常ニ無用ノ費ヲ省キ、
金錢ヲ積ミ置キテ、萬一ノ變ニ備ヘンコトヲ謀

ルベシ。

得タル金錢ヲ悉ク費スモノハ、家ヲ興シ身ヲ
立テ難キノミナラス、或ハ凶年ニ遇ヒ火災ニカ
カルコトアレバ、忽落チブレテ衣食ニツマリ、人
ノ扶助ナクテハ生活スルコト能ハザルニ至ルベ
シ。人トシテ扶助ニヨリテ生命ヲ繋グハ、此ノ
上モナキ恥辱ト思フベシ。

サレバ、心アル人々ハ得タル金錢ノ中ノ幾分
カヲ積ミ置キテ、或ハ不時ノ變ニ備ヘ、或ハ慈善

ノ用ニ供ス。

金錢ヲ積ミ置クニハ、手元ニ置カズシテ郵便局ニ預クルヲヨシトス。然スルトキハ郵便局ニテ、本人ニ郵便預金通帳トイヘル帳面ヲ渡シ、之ニ預金ノ高ヲ記シ、毎年一度利子ヲ計算シテ元金ニ組ミ込ミ、且入用ノヲリニハ、何時ニテモ預人ノ乞ニマカセテ拂戻ヲ爲スナリ。

汝等成長ノ後勤勞シテ金錢ヲ得ルニ至ラバ、奢ヲツ、シミ用ヲツ、マヤカニシテ、毎月必預金ヲ爲スベシ。最初僅少ノ間ハ、何ノ用ニモ立タザルヤ、ウニ思ハルレドモ、絶エズ預クルトキハ、積モリ、テ按外ノ高トナリ、一カドノ用ヲ達スルニ至ル。諺ニモ「塵積モリテ山トナル」トアリ。此ノ言ヨク、味フベシ。

文題 一、蓄積。 二、前題の返事。

第二十一課 正直の徳

一人の童子あり、一枚の銅貨を投げ上げつゝ、遊び居るが誤りて其の錢を或る家々垣の中

ふ投げ入れしり。

童子之を取らんとせれども取る能はず泣き悲とて居たる處へ此の家の主人出で來れり。主人ハ童子の泣くを怪之汝ハ何故ふ其所ふ居て泣くかと問へば童子ハ主人ふ前の始末を語りたり。

其の時主人ハ己の懷中より一枚の金貨を出し汝が失ひたるいおれふりやと問ひしに童子ハ否然らず我が失ひし金貨ふはあらざうとい

ふ。主人又一枚の銀貨を出し然らばおれふりやと問へば否我が失ひし銅貨ありと答へたり。其の時主人ハ前ふ童子の失ひたる銅貨を拾ひ來りて之ふ與へ且曰はく汝ハ誠ふ正直なる善き童子なり汝の偽り貪らざる賞として之を與ふべしとて前の金貨と銀貨とを併せて與へたり。

然るに他ふ一人の童子あり前の童子が金貨と銀貨とを得たるを聞き己れも之を得んと思

ひて或る日此の家へ前へ行き故らに一枚の銅貨を垣の内へ投げ込み、偽りて泣き悲み居たり。主人へ、其の聲を聞きつけて、内より出て來り、仔細を問ひければ、童子へ、何やまちて錢を垣の内に投げ入れざることを告げり。其の時、主人へ試みに金貨を出して、汝の失ひいふれありや」と問へり。童子へ、忽ち笑を含み、遽しく答へて、然り其の金あり」といふ。主人怒れる聲へて、汝へ偽りて我が金貨を奪はんとするや、汝の志惡し

き童子なり、我へ、汝が如きものに此の金貨を與ふること能はば、汝の投げ込きたる銅貨と此の深き溝の中へ入れり。を拾ひ上げんと思はば、汝自溝の中へ入りて取るべし」とて、立ち去れり。

童子へ主人の言を聞きて大いにお慙ぢ、又偽の人を欺く能はずして、徒らに自辱を招くを悟り、遂に再虚言を吐くことを止めたりといふ。

文題

一、貯蓄の必要。

二、儉約を勧むる文。

第二十二課

劔術自慢の武士

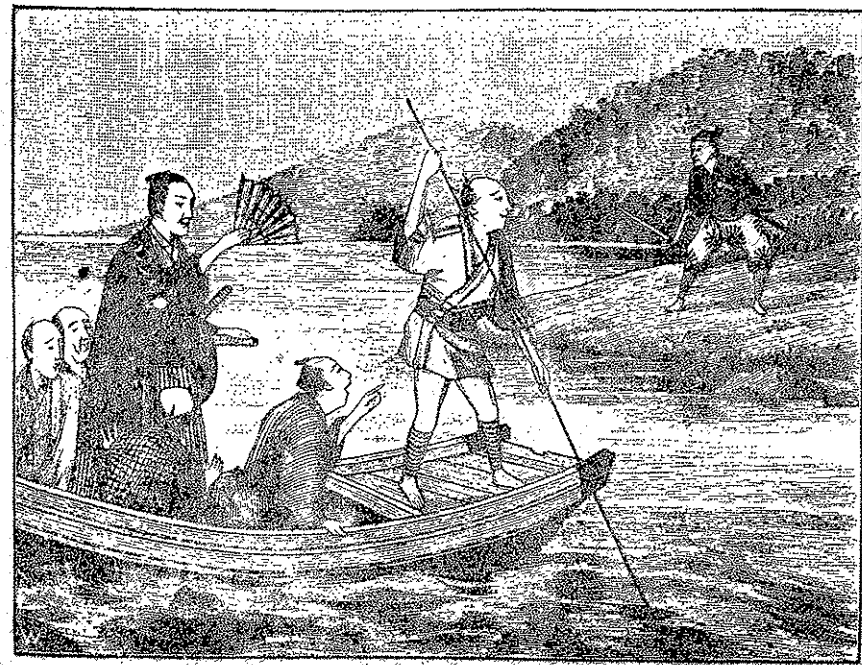
昔劔術自慢の武士ありけり。近江なる矢走の渡舟に乗り、乗合の人々お向ひて、我の天下無雙の劔術つゝのひるり、世に名人多しと雖、我お勝つものなり。とて、頻お大言を吐き居たり。

折りふゝ塚原ト傳といへる名高き劔術つゝのひも乗り込み居けるがト傳の膝をかゝて居睡し聞かざる真似して居たりけり。

彼の武士やめてト傳を呼びて、君も武士ならずや、劔法の何らまゝに心得居らるべし。とて之を辱しめんとしけり。ト傳徐かに答へて、僕の術を君と異なり、君は徒らに人お勝つおとを求むれども、我は唯負けざらんことを務むるのみ。といふ。武士奮然として、然らば君の劔術は何流なりや。と問ふ。ト傳答へて、無手勝流なり。といふ。武士又、無手勝流ならんおの、兩刀は何のためお帶ぶるや。と問へば、ト傳是は高慢の心を斷つものにて、人を斬るものおあらず。と答ふ。

山崎闇斎言ノ
武士益怒りて然らば、君能く無手にて我ふ敵を
るかといひければ、ト傳
素より無手ふて相手を
べし。とひひたり。

斯くて武士、水夫を
呼び、直に舟を岸ふ着け
しめんとしければ、ト傳
往還ふて試合せむ傍人



を傷つくるの恐あり、人なき處こそ善けれ。とて、
或る静のある地お着けしめたり。

舟の岸に近づくや、武士は躍り出でて陸ふ上
り、刀を抜きて麾き、早く來りて試合せよ。と呼び
ければ、ト傳も徐かに帶刀を脱して、之を水夫に
預け、其の棹を取りて、強く岸を突きければ、舟ハ
忽沖の方へ離れ去りたり。此の時ト傳、扇を開
きて麾きつゝ、口惜しきは水を泳ぎて來られよ、
我の無手勝流ハおれあり。とて、高聲お笑ひたり。

とす。

文題 一 置。 二 拾遺。

第二十三課 近世の歴史

徳川家康征夷大將軍ニ任ゼラレテヨリ後子孫相嗣ギテ天下ノ政ヲ執リ行ヒケルガ其ノ末年ニ至リ外ニハ歐米諸國ノ來リテ交通ヲ求ムルアリ内ニハ尊王攘夷ノ說ヲ唱ヘテ徳川氏ヲ傾ケントスルモノアリ世ノ中將ニ亂レントスル兆アリシカバ時ノ將軍徳川慶喜國家ノ將來

ヲ慮リ政ヲ朝廷ニ還シ奉リテ禍亂ヲ未發ニ防ギタリ。コレヨリ今上陛下親シク天下ノ政ヲ知シ召シ開國進取ノ方針ヲ定メ給ヒテ廢藩置縣ノ令ヲ下シ徵兵令ヲ布キテ大名ト武士ノ常職ヲ解キ給ヘリ。又大イニ學校ヲ興シテ兒童ヲ教ヘ導キ或ハ道路ヲ開キテ往來ヲ便ニシ或ハ外國ノ法ヲ取リテ汽車汽船郵便等ヲ起シ給ヒ明治二十二年ノ紀元節ニハ帝國憲法ヲ發布シテ國家ノ基礎ヲ固メ臣民ノ權利ヲ明カニシ

給ヒケレバ、國運日々ニ進ミテ旭日ノ天ニ昇ル
ガ如ク、今ヤ東洋第一ノ文明開化ヲ成シタリ。

文題

一、自慢スベカラズ。

二、落物局。

第二十四課

政府及ビ租税

我等人民ノ毎日家業ヲ營ミテ、心安ク世渡リ
ヲスルハ何ニ因リテナルカ。是レ我等ガ自働
キテ生計ヲ立ツルガ故トハイヘド、他ニ之ヲ保護
スルモノアルヲ以テナリ。我等ヲ保護スルモ
ノトハ何ゾヤ。是レ我等ノタメニ、天皇ガ設ケ

サセ給ヘル國ノ政府ナリ。

政府ハ、人民ノ生命ヲ保護シ、財産ヲ保護シ、種
種ノ權利ヲ保護シ、我等ヲシテ安全ニ世ヲ過サ
シメンガタメニ設ケサセラレタルモノナリ。
故ニ國ニ政府アルトキハ、如何ナル惡人アリト
モ、我等ヲ犯シ苦ムルコト能ハザルナリ。

サテ我が國ノ政府ハ、外務、内務、大藏、陸軍、海軍、
司法、文部、農商務、逓信ノ諸省ニヨリテ成リ立チ、
其ノ上ニ内閣アリテ之ヲ總フ。コレヲ中央政府

トイフ。此ノ外、全國ヲ一道三府四十三縣二區分シ、各其ノ地方ニ官廳ヲ設ケ、中央政府ノ命ヲ受ケテ、其ノ政務ヲ行ハシム。コレヲ地方廳ト云フ。

斯ク多クノ官廳アルガ上ニ、之ニ屬スル役人モ夥シキコトナレバ、政府ニ於テ莫大ノ費用ヲ要スルハ勿論ナリ。而シテ其ノ費用ハ一國ヲ保ツニ缺クベカラザルモノナレバ、我等國民ヨリ納メスハアルベカラズ、コレヲ納税ノ義務ト

イフ。然ルニ、世ニハマ、是等ノ道理ヲ辨ヘズシテ、租税ヲ納ムルコトヲ怠リ、或ハ税金多シトテ、ヒソカニ苦情ヲ訴フルモノナキニシモアラズ。是等ハ、皆國民タルノ義務ヲ忘レタルモノナリ。サレバ、政府ヨリ課スルトコロノ租税ハ、奮ヒテコレヲ納メカリソメニモ、其ノ時ヲ違フベカラズ。

文題

一 大名ト武士。

二、大試験中及第セしことを父に知らせる文。

第二十五課

國體

家ふたそれぐの慣習あり、之を家風といふ。家族にして家風を知らざれば一家の親睦を傷ふべし。國には自ら國がらあり、之を國體といふ。人民ふして國體を知らざれば、一國の平和を害することあり。されむ、汝等深く我が國體を辨へ、常ふ國家の安寧を祈らむとあるべからず。

抑我の國第一代は天皇は神武天皇にまゝま
せども遠く其の御先祖を尋ねれば、天照太神と

て、今伊勢の國に祭れる神ふぞありける。

初め皇祖天照大神の皇孫瓊瓊杵尊をして國土を治めしめんとし給ふ時、寶劍、神鏡、瓊玉の三種の神器を授け、詔して、豐葦原の瑞穗は國は吾が子孫の君たるべき地なり、汝行きて治めよ、寶祚の隆んあらんと天壤と窮りあるべし」と宣へり。其の御代より今日に至るまでは幾千年を経たるや詳ならざれども、其の御子孫一系嗣ぎ給ひて皇祖の詔に違ふことなし。

歴世の天皇は、宮室を卑くして、深く民を愛し、衣食れ道を教へ給ひ、臣民は古より忠孝を重んじ、尊王愛國の心深く、戦に臨みては、死を畏るゝことなり。故に古來、未だ曾て外國に侵略を受けど、却て威を外邦に輝かしたることあり。

世界の廣く邦國ハ多しと雖、斯くの如く萬世一系の皇室を戴き、君仁し臣忠ある國ハ、我々の國の外あるよしあり。我等ハ、今此の萬國無比に國土ふ生まれ、高大無邊の皇恩に浴し、何の幸福

か之ふ如かんや、されば我等ハ須らく能く智を研ぎ、徳を修めて、益國家の隆昌を謀り、猶皇祚の天壤と窮りあるらんことを祈るべきなり。織り出せる高麗唐土の品とあれど、

大和錦ふちくをのぞみ。

文題 一、租税。 二、元の先生ハ尋常小學科を卒業せしことを知らする文。

第二十六課 神樂歌

君の代の
久しかるべき
ためしや

神も植ゑけん 住吉の松

春日山

岩根の松ハ 以てねども
ちとせを緑の 色ふ知り
峯の嵐は 音せねど
萬歳の響ぞ 耳ふ満つ

三笠山

生ひ添ふ松は 枝ごとに
絶えずも君の 榮むべきかあ

色變つぬ

松と竹とは 末の代を
孰れ久しと 孰れ久しと
君のゑぞ見ん 君のみぞ見ん
孰れ久しと 君のゑぞ見ん

文題

一、三種の神器。

二、朋友の高等小學校を卒業せしを祝する文。

明治廿七年八月十二日印
 同 年八月十五日發
 同 年九月廿五日訂正再版印
 同 年九月廿八日發行

定價金拾錢

金港堂書籍株式會社編輯所編輯

東京市目黒區本町三丁目十七番地

發行所 金港堂書籍株式會社

代表者 原 亮三郎

大阪市東區南本町四丁目 金港堂

官城縣仙臺市國分町五丁目 金港堂



賣捌所

社会科

明治. 27.
乙 23
柳川島流